

第22回東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成29年1月19日（木曜日）13時00分から14時45分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 秋元評議員、太下評議員、小山評議員、仲道評議員、野田評議員
野村評議員、花柳評議員、日比野評議員、宮田評議員、森評議員
吉本評議員、草加部会長、小池知事
- 4 議 事 (1) 文化プログラム検討部会報告
・2020年までの東京文化プログラム展開プラン（案）について
(2) アール・ブリュット検討部会報告
・アール・ブリュット検討部会報告書（案）について
(3) ホール・劇場等問題調査部会報告
・これまでの部会・ワーキングにおける議論の概要について
- 5 その他 都立文化施設の次期指定管理者について
- 6 発言内容

○文化振興部長 ただいまより第22回東京芸術文化評議会を開催いたします。皆様、お忙しい中、御出席ありがとうございます。本日は、福原会長、浅葉評議員、杉本評議員、大野評議員が、所用により御欠席との連絡をいただいております。福原会長から、本日の会議の進行を前回に引き続き、吉本評議員にお願いしたいとお言づてをいただいております。吉本評議員に議事進行をお願いしたいと思いますのですが、皆様、よろしいでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○文化振興部長 それでは、よろしく申し上げます。

○吉本評議員 ありがとうございます。それでは、議事進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。本日の会議に先立ちまして、まず小池知事から御挨拶をお願い致します。

○小池知事 東京都知事、小池百合子でございます。本日は、皆様、本当に御多忙のところお集まりいただきましたこと、そして、これまでもさまざまな御貢献を賜っておりますこと、改めて感謝を申し上げます。

2020年東京大会まで、残すところあと3年ということで、スポーツが注目を集めているわけでございますけれども、ここはまさしく日本の素晴らしい文化を世界に伝えていく絶好のチャンスであると考えているところでございます。そして、伝統の文化芸術、さらには新しい芸術文化はぜひとも色々な付加価値をつけながら、マーケティングもきっちりとしながら、しっかりと世界に突き刺さるように伝えていく、その宝探しを皆様方とともに進めていきたいと考えているところでございます。

トランプ大統領はアメリカファースト、私は都民ファーストでございますけれども、こ

の都民ファーストの都政の具体的なプランを先日発表させていただきました。2020年に向けた実行プランでは、先駆的な文化プログラムの展開、文化資源の集積、地域の個性を生かした東京の魅力の向上策、国籍や年齢に関わらず、誰もが輝く東京づくりをしたい。一言で言うと、ダイバーシティと申し上げているんですが、以前、政党の会議でこのダイバーシティの話をしたら、それはどこの駅にあるんですかと聞かれたこともございました。東京は既にダイバーシティにあふれていると思いますが、もっともっと磨きをかけることによって、世界中に日本の素晴らしさ、文化を伝えることができると申し上げているところでございます。

本日は、第5期の東京芸術文化評議会の総決算とも言える重要な会議となります。2020年までの文化施策につきまして、皆様方の忌憚のない御意見を賜ればと考えているところでございます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございます。

○吉本評議員 本日の議事は三つございます。各部会から報告をいただいて、議事ごとに意見交換をしたいと思ひます。小池知事からも、議事ごとに御意見を頂戴したいと思ひます。それでは、最初の議事、文化プログラム検討部会の報告です。部会長の私から御報告をいたしますが、まず、その前に、昨年夏、リオで行われた文化プログラムの先駆けである「東京キャラバン」と「TURN」を映像でご覧いただきたいと思ひます。

(動画再生)

○吉本評議員 野田評議員、御説明いただけますでしょうか。

○野田評議員 2年ほど前に、この場で始まったことです。こういう公の場は、きれいな文言はいっぱい出るけど、具体的なプログラムがなかなか出ないので、例えばこういうのはどうかと提案しました。また、文化の文字が交通の交に似ているので、「交わる」をテーマにしました。今、他の都道府県から、キャラバンが来るか問い合わせが来ていて、展開としては、非常にいい方向に行っています。ぜひ、これからの新しい2020年のプログラムに入れてほしいと思ひています。

○吉本評議員 リオでは、「TURN」も展開されました。「TURN」は日比野評議員から御提案いただきました。解説をよろしくお願ひします。

○日比野評議員 「TURN」には、二つ大きな柱があります。まず、障害者施設や高齢者施設にアーティストが滞在するという展開を、今回はサンパウロで行いました。サンパウロの4つの施設に、2人の日本人アーティストと2人の在ブラジルの3世のアーティストが滞在して、モンチ・アズールとピパという自閉症の人たちが通う施設、日系1世の人たちがいる「憩の園」という高齢者施設、そして、日本人関係者が運営している施設で、日本の伝統工芸を持ち込んだ交流を行いました。それをこのリオの会場で展開しました。

リオ大会に来られた方々にも、このサンパウロの施設の様子を、アーティストを通して伝えて、そして、サンパウロでつくったものを、ワークショップ形式で作っていくアーティストの交流と、ワークショップを通して市民に伝える。それぞれの能力に合った表現方

法をアーティストが探って、日本の伝統工芸を軸にして表現したプログラムを行いました。

東京でもまだ始まったばかりの取り組みで、ブラジルでの展開がどうなるか、心配もしましたが、ダイバーシティが進んでいるというか、色々なものが混在している状態を受け入れざるを得ないブラジルだからこそ、日本で危惧したようなことはほとんど起こらずに、逆に日本が学ぶべきところがたくさんあったように感じます。障害ある、なし、国籍の関係なしに、みんなが一緒に物をつくるのが素直にできるなど、学ぶべきところがたくさんありました。このブラジルでの展開の後、今年、アルゼンチンで「ビエンナーレ南半球」という、ダイバーシティをテーマとしたアートのイベントに、「TURN」が招待されました。世界に発信するプログラムになっていくべきだと実感して参りました。

○吉本評議員 私も太下評議員と一緒に拝見したのですが、リオやブラジルの方が、ワークショップにすごく熱心に参加していたのが印象に残っています。

私から、部会での検討について御報告させていただきます。資料2を御覧ください。先般の文化プログラム検討部会では、次年度以降の新たな展開について議論を行いました。本日は、2020年までの東京文化プログラムの全体像を御報告いたします。資料2は、2020年までの東京文化プログラムの展開プランを示しております。文化プログラム全体を大きく四つのカテゴリーに分け、見開きで、同じ色で示しております。

まず、資料の一番下のブルーの部分は、東京の文化振興を支える土台となります。都立の文化施設、都響、東京芸術祭、上野「文化の杜」、伝統文化芸能、アール・ブリュットなど、これまでの実績の上に、東京の芸術文化基盤となる取り組みを推進していくというものです。今、御報告をいただきました、リオで展開した「東京キャラバン」、「TURN」も拡充し、この土台となるプログラムをしっかりと推進していく計画です。

次に、その上のオレンジ色の部分は、民間が実施する事業に様々な助成を実施していくというものです。これまでも色々助成を行っていましたが、文化プログラムに向けて、海外アーティストの新作発表や先端技術と芸術文化の融合など、東京文化プログラムを重層化するために、東京都が主体になるだけではなく、民間の知恵やアイデアを積極的に推進し、創造力を発揮していただきたいと考えております。

3番目、その上の緑の部分は、2020年に集大成として、「東京2020フェスティバル」が予定されており、そちらを視野に入れていきます。新たに展開する象徴的なプログラムという位置づけで、アーティストやクリエイターから企画やアイデアを募って、新たな発想を取り入れた斬新な事業、オリンピックならではの夢のあるプランを都の独自事業として構築・実施します。同じ枠組みの中で、場の開放もございますが、こちらはスポンサー企業を初め、民間企業と連携して自社ビルを開放して、都民が主体となって取り組める文化プログラム、芸術文化活動の場を創出します。知事のおっしゃる都民ファーストで、色々なことが展開できる場をつくり出せればと思っております。

姉妹都市であるパリ市との交流事業も既に予定がありますが、そうした国際的な発信力

も、一層強化をしたいと考えております。

そして、4番目の網かけの部分は、組織委員会との連携などを視野に入れていきます。組織委員会では、宮田長官の御尽力でエンブレムが決まり、それをモチーフにした二つのロゴマークが既に用意をされております。組織委員会と連携して、このロゴマークも活用しながら、東京2020大会を文化から盛り上げる試みです。

ここまで御説明した取り組みは、東京芸術文化評議会でも御議論いただいた東京文化プログラムの基本的な考え方に基ついておりまして、本日の資料の最後に参考資料として追加しております。七つの考え方に基ついて色々なことを展開する予定です。

これら四つの枠組みを通して行う文化プログラムでは、幾つか重視すべきポイントがあります。まず、オリンピックならではの斬新な事業、東京の文化的なポテンシャルを世界に示せる事業を展開します。今、スクリーンに、ロンドン大会の例が出ております。左上の写真は「ピカデリー・サーカス・サーカス」です。1945年第二次世界大戦の戦勝パレード以来、初めてピカデリー・サーカス一帯を道路閉鎖して、世界中から招いたアーティストが終日イベントを行い、大変な話題になりました。ご覧いただいているのは、そのフィナーレの様子です。こうしたシンボリックな事業を、若いアーティストやクリエイターの斬新な発想で実現させたいと考えております。

二つ目は、都民の誰もが参加できる事業です。左下の画像は、「ビッグ・ダンス」という、全英で展開されたイベントの様子です。体の悪い方も車椅子に座ったまま上半身だけでダンスできる、ビッグチェアダンスという催しも行われました。東京都でも、都民であれば誰もが参加できる事業をぜひ実現できればと思っております。

この二つの例に共通するのは、屋外で、無料で、誰もが参加・鑑賞できるという形で行われたということです。オリンピック開催中に競技場に行かない人、行けない人、スポーツに興味ない方も含めて、文化を通してオリンピックに参加できる枠組みを用意して、東京2020大会を都民の記憶に残るものにしていく。東京文化プログラムで、そうしたものをぜひ実現できればと思っております。以上、文化プログラム部会からの報告でした。

これから評議員の皆様から御意見を頂きますが、まず、同じ部会でご検討いただいた太下評議員から、補足すべき点や御意見をいただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

○**太下評議員** 東京文化プログラムの展開に関して、一つ提言をさせていただきます。

皆さん、御存じのとおり、この文化プログラムに関しては、組織委員会の公認マークと応援マーク、政府の「beyond2020」という三つのカテゴリーとロゴが出ています。そのような状況の中、「東京文化プログラム」が第四のカテゴリーとして参入するのが望ましい戦略なのかというと、私はちょっと違うと思っております。

若干復習の意味も込めて振り返りますと、直近のオリンピックでは、文化プログラムの正式なロゴがありましたが、このマークがつけられる主体は限られます。しかし、政府やホストシティー、オフィシャルスポンサーだけだと、オリンピック文化プログラムは広が

らないということで、2012ロンドン大会のときは、「インスパイアード」という名称で非営利のマークを作りました。オフィシャルスポンサーとの関係もあるので、営利企業のプログラムは遠慮してもらったようですが、この「インスパイアード」に多くのプログラムが参加して、文化プログラム全体がものすごく大きな運動になったわけです。そして、ロンドン大会以降、IOCのボードにも文化を担当する理事が生まれたという変革にもなったのです。

日本もこれをうまく引き継げればいいのですが、現状では残念ながらこれに相当する応援マークに申請できる非営利団体は限定されています。そこを見越して、政府はオリンピック史上初めての、第三の 카테고리になる「beyond2020」をつくったのです。ただ、御案内のとおりロゴが乱立する状況になっています。そうした中で、「東京文化プログラム」が第四の 카테고리になるべきかということ、やはり違うだろうと思います。もう少しクリエイティブな展開をしないと、小池知事がおっしゃっている都民ファーストの広がりになっていかなのではないのでしょうか。

その中で、先ほど紹介あった日比野評議員の「TURN in RIO」がヒントになると思います。先ほどの繰り返しになりますが、「TURN in RIO」は、アーティストである日比野評議員のプログラムという顔がありながら、もう一方で、そこに4人の若手アーティストが参加するグループワークでもあり、さらにそこに施設関係者やワークショップ参加者など、多くの方が参加するプラットフォームであるという、三層構造になっています。こういう三層構造で多くの広がりを持ったプログラムを20から30つくっていくと良いのではないかと私は考えています。そのためには、ある程度、発信力とカリスマ性のあるアーティストが先頭に立って、有能な若手アーティストがそこにチームを組むという前提が必要です。こういうプログラムが20、30できてくると、多くの都民や来街者が参加できることになり、これは、まさに小池知事がおっしゃっている都民ファーストにつながる動きになるのではないかと思います。逆に、そういうプログラムがないと、文化プログラムの全体像が見えにくい状況のママになってしまいます。この課題をクリエイティブに解決していくこと、それが東京都の文化プログラムの使命ではないかと思っております。

○吉本評議員 文化プラットフォーム、組織委員会の動きも視野に入れながらという重要な御提案、ありがとうございます。他の評議員の先生方、いかがですか。

部会からの説明では、若いアーティストやクリエイターのアイデアを公募して、ユニークなものをやりたいという考えで御説明しましたが、森評議員は、若いクリエイターと常におつき合いがあると思います。文化プログラムについていかがでしょうか。

○森評議員 現代美術館ですので、若いアーティストとのつき合いは大変広く持っております。森美術館、国立新美術館、サントリー美術館、六本木を中心に「六本木アートナイト」を5年、6年やって参りまして、地域に広がってきたことが特徴だと思っています。

最初は何が起こるのかと思っていた、商店街や地域の方たちも、積極的に参加するようになりました。去年はスポーツ文化フォーラムがあったので二晩でしたが、一晩だけのアートの祭典として、街に出て広がりを見せてきております。そしてオリンピックに向けて、もっともっと充実させていこうと思っております。

オリンピックの文化プログラムに関して申しますと、ロンドン大会が大成功したのは、「カルチュラル・オリンピック」と言われる、文化プログラムが充実していたからだと言われています。ロンドン大会後の報告会等で、ルース・マッケンジー氏と大ロンドン庁、アーツ・カウンシル・イングランドが中心になっていたと聞きました。そういう組織基盤がしっかりすると、色々なところからアイデアが出ると思います。ルース・マッケンジー氏は素晴らしいパワーを持っていましたが、東京都もそういう方を立てる必要があるのではないかと、そうしないと、色々なプログラムがあっても、なかなかまとまりがつかないのではないかと、思っております。アートと最先端の技術を融合させた、ドローンを飛ばすとか、無人の車を走らせるとか、地域で色々な実証実験をやるということも含めて、アイデアはいろいろ出ますけれども、それをまとめる場所が組織的に必要だと思っております。

そして、助成金の話が出ましたけれども、この助成金がどの程度、どういうふうに出るのか、このオレンジ色は助成金と言うお話でしたけど、その上の緑色は民間が資金を出すのか、全部出すのか。その辺もきちんと見えてこないと思っております。

○吉本評議員 助成金に関して御意見を頂戴したので多少補足いたしますと、オレンジ色の部分は助成金ですので、民間が主催するものに対して東京都が一部助成するという形です。緑は、アイデアを募って、東京都が主催の事業としてチームをつくってやっていくという、イメージです。その中で、ルース・マッケンジー氏のような強力な方にディレクションをお願いすることも、組み立てていければいいと思っております。仲道評議員、何かございますか。

○仲道評議員 2020に向けた文化プログラムが、成功だったと評価されるか否かというのは、何が残ったかだけではなく、残ったものの「質」が大事だと思います。一般の人々が実生活の中で、その後もずっと感じ続けられるようなものになっているかどうか大切に思います。

文化プログラムを採択していく審査基準として、ポスト2020に向けて、どのような仕組みをつくることができるのか。先ほど、太下評議員のおっしゃったことも一つのあり方だと思います。そして、それを継続していくための仕組や機構、文化プログラムの拠点となる東京都の様々な文化施設が、2020以降を見据えてプログラムを構築できる形をつくっていかないと、その後に続かない懸念があります。

○吉本評議員 確かに一過性になってはいけない、次を見据えてという重要な部分だと思います。ほかの評議員の皆さん、いかがですか。小山評議員、お願いします。

○小山評議員 僕は昨年、今年度の助成事業の審査をしたのですが、審査をすることで

上がってきた企画を色々知ることになり、その企画内容を読んでいるうちに非常にどれにも興味を持ちました。新たに展開する象徴的なプログラムを一般公募する場合には、一部の審査員が審査するよりも、企画書甲子園のように、都民の皆さんが見て、どこに賛同したいか、もしかしたら、クラウドファンディングでお金が集まったものを都が応援していく。この応援というのは決して金銭的な応援だけではなく、いろんな法律の認可を。

○吉本評議員 成果を出して。

○小山評議員 はい、そこが一番大きいと思いますので、そういう人々を巻き込んだやり方というのは一つあるかなと思いました。

○吉本評議員 今の公募、助成については部会でも色々議論が出まして、これからまたさらに踏み込んで議論する予定なのですが、仕組みづくりもそうですし、イベントのアイデアをもらうだけではなくて、幅広い、広がりを持てる仕組みをつくらなければいけないと議論しております。宮田評議員と日比野評議員は、いかがですか。

○宮田評議員 全体のお話をさせていただきたいのですが、まず、東京の魅力は何だろうかと考えたときに、水であると。ここが絶対的な売りになると思ったときに、過去を振り返るならば、四大文明も全て水の横であったことを考えると、この都庁の真上から東京を見ると、真っ暗な道が蛇行している、それは川なんです。水がなければ人間は生きていけないのに、全部背を向けている。ここを大きく変える。以前、隅田川ルネッサンスをやらせていただきましたが、ぜひこの2020をきっかけに、水の都東京、東京ルネッサンスみたいなものをつくったら、物凄く素晴らしいものになると感じています。例えば、パリのバトームッシュのように、そこに行くことで、東京の全てが見えるといったことがやれるといいと思います。必ず晴れもあれば雨もあるわけですから、風もあるわけですから、雨降ったときに、何かができる体制もこれからつくっていくと、それなりのおもしろさがある。

それから、このオリンピックのバッジは、つつるしていて視覚障害の人たちには何もわかりません。私のバッジは、視覚障害の人がわかるバッジです。今日のために作ってきました。ちょっとしたことを見過ごさないでやることで、文化プログラムはすごく発展していくと思います。

その一つの例として、上野の山文化構想、新文化構想をつくります。二十数館の素晴らしい文化施設がありますが、ばらばらなんです。ぜひとも、東京都にしかできない連携をつくっていただく。その力は、小池知事にあると信じておりますので、ぜひ、その仲間に入れていただきたいと思っております。以上です。

○小池知事 ありがとうございます。今のバッジのアイデアは素晴らしいと思います。早速、どれぐらいかかるのか確認し、そういった形でつくりたい。それから、都知事になりましてから二つやったことがあります。一つは、資料が全部A3判だったのをA4にして、今、ペーパーレスにしております。それが一つと、ピンバッジからマグネットに変

えたんです。簡単な話なんですけど、いっぱいできることがある。小さいけれども、皆さん、おお、そうだねと言ってくださるようなことはたくさんあると思いますので、さっそく障害のある方用のバッジを考えてみます。ありがとうございました。

○吉本評議員 確かに東京は水の都ですので、ぜひ川も使ってユニークなことができたらいいいと思います。では、秋元評議員、お願いします。

○秋元評議員 こういう委員会に色々とお出ささせていただいて、いつも思うのですが、日比野評議員が提唱された「TURN」や、野田評議員が提唱された「東京キャラバン」が形になって、素晴らしいものになった。そこで、どこまで一般の方々に伝わっているか、これが一番、いつも疑問に思うことなんです。昔の学校でいえば、文化祭実行委員の皆さんはみんな頑張っていて、何となくみんな集まって盛り上がるけれども、その時だけだと。これはもちろん東京都も国も、広報の皆さんが一生懸命頑張っているけれど、どこまでこれが伝わっているんだろうか。一般の方からすると、オリンピックの準備って、ちゃんと進んでいるのかと。

「TURN」も「東京キャラバン」も、素晴らしいことがニュースとしては伝わっているかもしれませんが、さらにこれを広めて、一般の方に興味を持っていただけるようにする。そうすると、「東京キャラバン」も「TURN」も、少しずつ、少しずつ広がっていくと思うんですね、全国を回って。東京都として、国として、これがもっと増幅するような広報活動、宣伝活動、どうやったら一般の方、まるで興味がない方にも、初めは、もしかしたらこれ、オリンピックの文化プログラムだと知らずに参加して、「あ、こういうことなのか」というような入り方があってもいいと思うんです。

これをどのように広めるか、もっと興味を持っていただくためにはどうするかということ、特別な委員会をつくるのか、部会をつくるのか。もちろん今もおやりになっていると思うのですが、もっとメディアを活用して、一部の方だけではなく、皆さんが楽しめるように敷居を低くして、広める方策を考えなくてはいけないのではないかといつも思います。これを機会に、僕も何か考えますが、ぜひ皆さんと考えたいと思います。

○吉本評議員 一人でも多くの人に伝えていきたいという部分ですね。「TURN」も「東京キャラバン」も、これからさらに強化する予定ですが、今の秋元評議員の御意見を含めて、日比野評議員、御意見はありますか。

○日比野評議員 「TURN」が走り始めて、来年度からは、国内、都内での拠点づくりをしていくながら、現在12～13の施設で行われているアーティストの交流も増やしていこうと思っています。今、秋元評議員が言われたように、どの街にも必ず施設はあり、何となく看板は見ているけれども入る用事もない、時々公園で障害者かなと思う人たちを見かけることがあっても、話すきっかけもないというのが、普通の日常であると思います。そういうときに、「TURN」を一つのきっかけとして、間にアーティストや物づくりなどの表現者が入ることで、その施設に入るようになる空気感というか、情報が流れること

によって広まっていく。

2020年以降、これらの施設は関係ない世界だという人たちにとって、同じ地域の仲間であると、意識が変わるきっかけとなる仕掛けを、広報という手段なのか、より施設に声を掛けていくという数なのか、今後検討していきたいと思います。

○吉本評議員 広報を宣伝のために別にやるというよりも、プログラムに組み込まれて展開されるのがいいような気がします。

○日比野評議員 あと、施設に行くアーティストは、誰でも行けるのか。江戸組み紐やつまみという技術を持っている人が、誰でも行けるのかということ、コミュニケーション能力や、アートコミュニケーション能力が必要になってくる。この春から東京藝術大学で、アーティストの人材育成講座を行うことになりました。一般の人も受講できる自主プログラムですが、東京都美術館と東京藝術大学が連携しているアートコミュニケーションで、とびらプロジェクトというプロジェクトがあるんですけども、その講座も取り入れて、色々な施設で展開できるアーティストの人材育成も積極的に行う段取りになっています。

○吉本評議員 「東京キャラバン」も、全国展開という話が先ほどありましたが、都民向けにも色々されているのでしょうか。

○野田評議員 まさに、秋元評議員がおっしゃったように、「東京キャラバン」は、もともと広がりを持つ企画で、色々なところで単発式に起きる。今までは模擬的にやっただけで、これから、どうやって広がりを持たせるかというのが一番大きい。その中で、まず組織をつくらなければいけない。組織の問題が出て、クオリティをどこに求めるかは非常に重要で、それを誰が決めるかがとても大きい。やってみて思ったのは規制緩和です。例えば、東京スカパライズオーケストラがラッパを吹くとみんなが喜ぶ。でも、1人すごいクレーマーがいると、そのことで全て変わるといって、具体的な問題がある。広げようと思ったら、お金をどういうふうに持っていくんだという話がある。そして最後、秋元評議員がおっしゃったように広報が物凄く大事なんですけど、我々の感覚からすると、公の組織がやる広報は弱いですね。

具体的に一つ、屋外のイベントをやる場合は雨が降ることがあるというのは、いつも気になっていることです。地方に行くときは、小学校を使わせてもらえれば、雨の時は体育館に逃げ込む、晴れていれば外、そういう単純なことでもいいと思うんです。こうなると東京都と国との連携の問題が出てくる。そういう具体的なことが、この2年、実際に色々動いてみて出てきました。

○吉本評議員 野村評議員はいかがでしょうか。

○野村評議員 東京都が主体性を持って、文化プログラムをお進めいただくということが、今日のお示しで非常に良く分かりました。秋元評議員がおっしゃったように、都民を初め、色々な文化団体が東京都の胸に飛び込んでいけるような、そういう広報は、どうしてもしていただきたいと思いますし、伝統芸能で言えば、伝統芸能と東京都の結びつきと

いうものが、もう一遍きちんと再評価されるようなチャンスに、どうしてもしていかなくてはならないと思います。

「場の開放」と書かれておりますけれども、芸能は、野外がとても大事な空間として位置づきます。旧岩崎邸庭園に行ったときに、建物は区の管理、土地は東京都の管理と、色々な文化財の管理が分かれていた気がするんです。そういう時に、外はどのように使われるのか、具体的にお進めになるときに、少し御検討をいただきたいと思います。

○吉本評議員 花柳評議員、お願いします。

○花柳評議員 日本には素晴らしい、私たちが関わっている日本の伝統芸能がございまして、これは世界に誇れるものだと、私は、自覚しております。ただ、日本人が、日本の古典の本当の良さを忘れかかっているんです。若い世代が振り向かなくなってしまった。日本の芸能は、いわゆるアンティークみたいな感じにされている。

日本の古典芸能は、能、文楽、歌舞伎、日本舞踊というように、非常に大ざっぱな分かれ方なんです。歌舞伎の方たちは、皆さん御自分でやって、野田評議員も中村屋と一緒に色々やって、若い世代の観客を集める努力をしていらっしゃるんですけど、ある程度行政が助成をしないと、個人で古典を維持するのは非常に難しいことなんです。

私はこの機会に、日本の芸能を世界へ発信していきたいと思いますので、それにはどうするか。ただ古典をお見せすればいいのか。もっと大勢の人たちが鑑賞し、参加できるような芸能を東京から世界へ発信することに目を向けていきたいと思っております。

○吉本評議員 草加専門委員からまだ御発言していただけていないので、お願いします。

○草加専門委員 文化プログラム検討部会の専門委員を務めさせていただいております。東京には、浅草、神楽坂、両国のように伝統を引き継いだ街がある。それから、渋谷、新宿、豊島のような新しい、副都心的な都市がある。また、東京駅や羽田という、日本を代表する交通の拠点がある。そういう地域と文化がうまくリンクすることによって、人と場所、それからアクティビティーみたいなものが、印象をつくっていけるんじゃないか。いい作品があることが人を集める大きなきっかけにはなりますが、それが場所や、地域の価値になっていく、それらが繋がることによって、東京という街をつくるというように繋がっていけばと思っております。

○吉本評議員 御発言を色々いただきましたけれども、一つだけ私から補足で、規制緩和も大変重要で、いつもロンドンの例で恐縮ですが、「ピカデリー・サーカス・サーカス」は、実現するために、警察、道路当局、ロンドン市のあらゆる部局が、色々な規制を撤廃しないとできないので、それを乗り越えて実現したそうです。それができるのは、やはりオリンピックだからだと思います。普段できないことも、オリンピックだからやろうと一致団結して、その結果、ロンドン市の全体が、新しいことをやろうという雰囲気、行政自体がなっていたと伺っております。これから3年半、ぜひそういうものが実現できるようになればよいと思っております。小池知事、お願いします。

○小池知事 皆様方の貴重な、そして具体的な御意見を賜りまして、本当にありがとうございます。

私、知事になる前に、結構パリに行くことが多くございまして、そして、たまにはパリに行ったときに音楽を聴いてみたいと思ひまして、ネットで調べて、マドレーヌ寺院で定期的に行われている音楽会の切符を買ったんです。私は、東京に行こうと思っている人たちが、どんなものを行っているのか、どうすれば切符が買えるのか、その方法はまだできていないと思ひます。これから、国内もそうですけれども、世界の方々に知らしめるアクセスの準備は、今の一つの例をとりましても、やるべきことはたくさんあると思ひております。

それから、歌舞伎にしても能、長唄などは日本語で、私は、日本語以外のなにものでもないと思ひています。日本人は暮れに、ドイツ語で「第九」を歌っていますし、オペラ大好きといってイタリア語で聴いていますし、ですから、もっと日本語で堂々とやればいい。しかしながら、知らしめる方法は、ピコ太郎ではありませんけれども、お客が何語を理解するのかを細かくもう一度確認して、少なくとも英語で広報していくことが極めて重要で、その上で、コンテンツとしての文化、芸術、芸能、色々なことについて、まず知らしめる。

よく広告の世界で、暗闇でウインクしていても意味がないと言われますが、これまでも「東京キャラバン」にせよ、「TURN」にせよ、それぞれの分野で御活躍いただいていることを、いかにして東京都として知らしめていくか、それが我々の役目だろうと思ひております。

それから、みんなが「あ、オリンピック楽しいね」、で、「終わってよかったね」ということだけではなくて、やはりそこに、どのように参加していただけるかが大変重要で、その意味では、先ほどの障害のある方にもちゃんとわかる、目の不自由な方でもちゃんとわかるという、細やかな気遣いも必要だと思ひることが一つと、本来は組織委員会を出しているものですけど、私の発案として、今回のエンブレムを活用して風呂敷をつくりました。これは八王子の絹でできていて、とてもタッチがいいんです。デザインは野老さんをお願いして、スカーフにも使えるし、風呂敷にも使えます。風呂敷は、環境大臣の頃からずっとこだわっていて、レジ袋を使わないという環境政策でした。これは環境大臣のときに私自身が、デザインしたといたら叱られるんですけど、伊藤若冲です。「もったいないふるしき」といって、大臣として海外を回るときのお土産にして、ペットボトルのリサイクル繊維で、これでもうストーリーができています。風呂敷はアートで、かつ、環境のメッセージがあって、包み方がいろいろあってということで、これをできるだけ膨らませていくことで、もっともっと増やしていきたいと思ひています。日本の持っている美德、伝統、文化で、ちょっとした工夫をすることで、皆がおもしろいと思ひたり、自分でやってみようと思ひ。そうすると、広報費用も安く抑えられたりして、要は、そこに突き刺さるかどうかという、その辺の研ぎ澄ましの方法なんだと思ひます。

今日、お集まりいただいている皆様方は、まさしく芸術を担っていただく皆様方、そして、それをいかにして広めるかということに御努力いただいている皆様方です。ぜひ、先ほどの規制の話も極めて重要ですし、音の問題で、お一人誰かが言うと、それって、保育所、保育園をつくるときの話と何か似通ったところがありますよね。規制の問題は努力してできますが、その意識の点については、社会をより成熟させていくという意味で、大きな課題かと思っております。

本当にたくさんの御意見、アイデアをいただきました。今色々考えているのは、この間、NHKの紅白歌合戦で、東京都庁がプロジェクション・マッピングのスクリーンになりました。プロジェクション・マッピングも技術と一緒に、日本の文化にできるのではないかと。それによって世界中に日本の文化を知らしめることも可能だと思う。

川は、宮田評議員のおっしゃるように、セーヌ川やプラハのカレル橋のライトアップなど、国が滅びそうだったのに、文化で建て直したところがあります。

改めて、私たちの東京にどんな宝物が転がっているのか、原石のままなのか、もうちょっと磨けばどんなに光るのか、そういった工夫を、2020年をゴールとして、皆さんから、こんなことできないだろうか、あんなことできないだろうかという御意見を賜ればと思います。また、名もないけれども、これから伸びる人たちというのは山ほどいると思うんです。チャンスがないだけだと思うんです。それから、見立てといいましょうか、金融の世界じゃありませんけれども、この会社はやっているのかというのは、土地を担保にするのではなくて、その技術や人を見てというところが足りなかったのかという状況になったと思うんです。一言で言うと、目きき、そういったところを皆さんから御協力いただければと思っております。

やり方はいっぱいあると思います。そこにうまく予算を、選択と集中でしっかりと、つぎ込むところはつぎ込んでいきたいと思っております。私もこの世界は好きなほうでありまして、自分でいろいろとアイデアも出すほうだと思いますので、皆様方と共にやっていきたいと思っております。

それから、最後に、私の好きな、ラ・フォル・ジュルネも素敵ですし、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールでやっているプロムは、盛り上がり、盛り上がり、すごいですよね。最近、それをまたユーチューブでご覧になる方もいらっしゃるの、そういったことも考えれば、一つひねるだけで、私は、大きく日本の評価が、既に高いんですから、それを更にアップグレードできると、改めて、今日思った次第でございます。本当にありがとうございました。

○吉本評議員 小池知事からも非常に具体的なアイデア等をいただきましたので、評議員の皆さんからいただいたアイデアも含めて、部会はこの後、検討部会から推進部会に切りかえると伺っておりますけれども、部会で引き続き検討して推進していきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

では、2番目の議事に移りたいと思います。アール・ブリュット検討部会からの報告です。こちらは、部会長である日比野評議員から報告をお願いします。

○日比野評議員 資料3-1、アール・ブリュット振興の検討について、去年の4月から始まりました。アール・ブリュットとは、正規の美術教育を受けていない人たちの表現、作品のことです。フランスの画家のジャン・デュビュッフェが1900年の初頭から提唱した、それまでの美術ではなく、専門の美術教育を受けていない人たちの表現に対して興味を抱いたことがきっかけとなっています。近年日本でもアール・ブリュットという言葉が盛んに使われていますが、多くの場合、障害をもった方の作品と同義語的に使われる場合もあります。この部会において、アール・ブリュットの作品をより多くの人に知ってもらうと共に、障害あるなしに関係なく、色々な異なる背景をもった、多様な方々の表現を互いに認め合う、ダイバーシティの振興として、会議を進めてきました。

アール・ブリュットの作品を皆さんに改めてパワーポイントでご紹介します。障害があるなしは関係なく、作品を見るとすごい力がある。作品にも力がありますけれども、当然見る我々の中にそれを感じ取る力があって、それを引き出してくれるのが作品です。その作品の作家に専門的な美術の能力があるとか、技術があるということではなく、表現の素晴らしさはこういう作品を見ると感じとっていただけだと思います。これは、3センチ、5センチぐらいで、グラビア雑誌の広告ページをハサミで1ミリにも満たないものを切って、切って、切って行って、細く紙がくるくると丸くなった作品です。この作品の作者である、藤岡さんという作家は作品をつくらうとしているわけではなく、彼が過ごす時間の中でできたものを見て、感じとる我々がいる。なので、アール・ブリュットの作品というよりも、アール・ブリュットの作家を知ること、障害あるなしに関係なく、こういう作品が生まれてくる。様々なハンディキャップをもった人たちのそれぞれの魅力に気づくきっかけとして、このアール・ブリュット、特に視覚的なビジュアル表現が、とてもストレートに入ってきます。

これは一見不思議なのですが、戸来^{へらい}さんという作家の日記です。彼独特の文字で、何月何日、天気、何々をしたと書いてある。施設のスタッフも最初は何か分からなかったのですが、毎日見る中で、あれ、これ、ひょっとして彼独特の文字ではないかと思いついた。多くの場合、障害者施設のアール・ブリュットの作家たちは、物をつくるというより、日常の営みで出てくるものを、スタッフがどうくみ上げていくかということがとても重要になってきます。このようなアール・ブリュットの作品を広めながら、ダイバーシティの意識を高めていくことを検討してきました。

アール・ブリュット検討部会報告書概要の第1章「アール・ブリュットが持つ魅力」について、作品を見ながら御説明させていただきました。第2章では、アール・ブリュットの作品を通じて、ダイバーシティの理解促進をするために、東京都庁と国際フォーラムで展覧会行いまして、アンケートをとりました。まず、「アール・ブリュット」を知ってい

るかという質問では、アール・ブリュットのミュージアムをつくったり、県が支援をしている滋賀県が断トツ12.7%で、「アール・ブリュット」という用語を知っている人が多いんです。それに比べて東京都は、5.4%という数字が出ています。

どこでアール・ブリュットを知ったのかという回答に関しては、都道府県や市町村の広報や取り組みという、行政の広報で知った方が21.6%となっています。

この数字を基にして、二回、アール・ブリュットの展覧会を行いました。一回目は昨年6月に都庁の南展望室、二回目は国際東京フォーラムで行いまして、展覧会を観て満足しているという方が8割近く、また来たいという方々も9割近くという数字になっています。

初めてアール・ブリュットを知った10代・20代は50%を超えています。若い人たちはやはり、余り認識がない。

これをベースにして、トーキョーワンダーサイト渋谷をアール・ブリュットの拠点として展示・紹介するために、この秋から改修を始めて、今後発信していく予定です。そして、先ほど文化プログラムで紹介した、「TURN」とも連動していきたいと思います。先ほど、秋元評議員も言われた、どこで発信していくのかについては、若者文化を発信する大きな拠点である渋谷で、アール・ブリュットに限らず、障害があるなしに限らず、色々なマイノリティー、コミュニティーの人たちが集える場所、先ほど太下評議員からもプラットフォームが必要だという話がありましたけれども、ここをプラットフォームとして展開していければと考えております。

○吉本評議員 アール・ブリュット検討部会からの御報告を日比野評議員からいただきましたが、評議員の皆様、御意見はいかがでしょうか。

○太下評議員 もしかしたら、この部会の検討事項の外側のことになってしまうかもしれないのですが、障害のある方や多様な方が、自由に表現活動をする環境ができるためには、その前段階として、そういう人たちが普段から文化に接する環境がないといけないと思うのです。

今、私は、お芝居を観たいという聴覚障害の方のためのNPOを個人的にサポートしているのですが、障害のある方がお芝居を楽しむためには、字幕、タブレット、または台本の貸し出しとか、色々な方法があります。

先般、増上寺で薪能が行われた時に、タブレットで社会実験をする機会に参画したのですが、非常にいい仕掛けで、障害がある方も、健常者にとっても、現代人はなかなか能の言葉が分からない中で、非常に分かりやすくできていました。

○小池知事 どういうふうにされるんですか。

○太下評議員 たとえば、太郎冠者が何か言っているときに、その台詞と説明がタブレットで見れるのです。非常に面白かったのが、太郎冠者が怒っていると、ポンポンという絵文字が出てくるのです。そして、「あっそうだよね、怒っているよね」ということが、現代人にリアルに伝わってくるのです。

実は、この仕組みをそのまま翻訳すれば、外国の人にも伝わる仕組みになります。障害のある方に真摯に向き合っていくことが、我々、現代人、健常者、さらに外国人にとっても役立つ仕組みになり得るがあると思うのです。

ぜひ、この障害者の芸術表現を推進していくべきです。これはアンリミテッドからの流れ、ロンドン大会のレガシーを継承する意味でもやっていくべきですけど、その基盤になる、障害のある人が普通に文化に接する環境づくりを東京都が中心になってやっていくことがそれ以上に重要だと考えます。そうすることで、文化プログラムが多くの人に開かれていくこととなります。さらに言えば、日本は字幕の文化です。映画をこれだけ字幕で見る国はあんまりないと思います。日本だからこそ、そういう字幕文化、タブレット文化ができると思うので、いい仕組みができれば、輸出産業にもなると思います。そのぐらいまで射程に入れた構想を2020年までに、ぜひ実現していただきたいと思います。

○吉本評議員 オリンピックを機に、太下評議員のおっしゃった仕組みができれば、2020年以降もインフラになっていく、重要な御意見だと思います。

○森評議員 森美術館でも、目で観るのではなく、手で、耳で聞くアートの鑑賞をやっております。展示された作品を目の見えない方々にどのようにお見せするか、観ていただくかを各展覧会で必ずやっておりますが、説明をする側にとっても、大変勉強になるんです。ここに何が描いてあるとか。通常は触れない立体作品に触ってもらったことありますが、例えば、赤い色のマントについての説明で、どういう赤かとか、説明の仕方を工夫する。健常者にとっても作るほうにとっても、大変勉強になるので、ぜひそういうことは、広げていきたいと思います。

○吉本評議員 アール・ブリュットに関して、いかがでしょうか。秋元評議員お願いします。

○秋元評議員 同じ話になりますが、作品が素晴らしいと思うんです。渋谷の公園通りで、どれだけの人が入って下さるかというところで考えると、全ての人はきっかけを求めているので、違う形を作らないと、我々のメッセージが伝わらないんじゃないか。どういふときに人はそれがきっかけになるかという、決していい例ではありませんが、例えばあるテレビドラマのタイトルバックで、ああいう作品がタイトルバックになって、あのオープニングのあの絵、素敵だよねとか、あのアートは素敵だよねっていうところが、大衆との接点だと思うんです。どうしても我々は、施設や場所を都や国が確保して、ここにそういう展覧会があって、来ていただいて、もちろんそれが大切な漢方薬的な体質改善で少しずつ、少しずつ広がっていくと思うんですが、どこかで、例えば抗生物質ではありませんが、何かきっかけがないと、あの5.4%が70%にはなかなかかならないのではないかと。

つまり、誰でもあの作品を見たら、すごいな、いいなと思うじゃないですか。それをもう少し広める策を真剣に考えないと、限られた方が足を運ぶ。運んだ方がまた、いいよと言って少しずつ、少しずつ広がっていく。これはもちろん大切なことですが、それを劇的

に30%、50%にするために方法を考えなければいけないのではないかと。

○吉本評議員 小山評議員お願いします。

○小山評議員 秋元先輩に似せて言いますと、東京都だからできることって例えばあると思うんですが、じゃあこのお水のパッケージをそのアール・ブリュット作品にする。これが非常に共感を呼んで売れていく、あるいは東京都の施設、先ほど小池知事がおっしゃったプロジェクション・マッピングを利用して、アール・ブリュットの作品を東京都庁に映写してみるとか、まずは東京都庁の全ての課の職員に何ができるかを、自分の身としてアール・ブリュットをとらえるのが非常に効果があるのかなという気がします。

○吉本評議員 生活文化局だけで考えていたのでは、だめということですよ。

○秋元評議員 映画でいえば試写会がありますよね。そういう形で、色々な方に招待状を出して、ここでやりますよということをなさっているのかもしれませんが、それが届いていない気がするんです。一部の方々だけでなく、普段、関心をもっていだけないような皆さんにも伝える努力をすべきだと思います。もう少し発信力のある、テレビのドラマ担当なのか、バラエティ担当なのか、ドキュメンタリー担当なのか、あるいはラジオや新聞や雑誌やネットなどのメディアの皆さんにも、トーキョーワンダーサイト渋谷に観に行っていたら、何か変わる気がするんです。

やはりどうしても生まじめにやるだけだと、そこから広がらない気がするんです。これも例えばああ、やっぱり東京の水はおいしいな、東京はいいな、でも、これももっと爆発力のあるきっかけが何かあると思うんです。そこに何か欠けている気がします。

○小池知事 私も、この安全な水を世界に広げる努力をしようと、水道局に言っております。まず、このデザインから変えていく。例えば航空会社は、必ず水を配ってくれますよね、日本の航空会社はきっと協力してくれると思いますけれども、そうしていくと、お水一つで東京のPRになるんですよね。とてもいいアイデアを頂戴しました。どういう形がいいのか、研究してみます。

○吉本評議員 ぜひエンブレムも一緒に入れて、何で水にエンブレムがついているの、となるといいですね。

○宮田評議員 つまり、当たり前だと思って通り過ぎないこと、これがすごく大事だと思います。東京都の委員会ですらなかったのはA3です。世の中A4サイズの内紙なのにA3だとファイルできない。今日とてもうれしかったですね。そういうことは。

○小池知事 次回はもうペーパーレスで。

○宮田評議員 隅田川ルネッサンスの話をしている時に、エヴィアンが出たんです。はっきり言いましたら、それから東京水になりました。こういうちょっとしたことですが。そして、それを振り返る、立ちどまる。アール・ブリュットという言葉ですが、50年間東京藝術大学にいましたが、藝大用語というのがあるんです。余り話さなくても何となく通じるのですが、結構問題も多いんです。やはり、どこかで引っかからなきゃいけない。

これは実は大きな落とし穴と同時に宝物であるという関係を、お話をお聞きして感じました。

○吉本評議員 アール・ブリュットについては、仲道評議員がダイバーシティについて日頃からおっしゃっているのも、ご意見はございますか。

○仲道評議員 色々な視点から取り上げることは素晴らしいですが、平等を目指して行うべきことであって、それが逆の意味で特別になっていかないような、線引きや、方法論も必要だと思います。

○吉本評議員 それでは、3番目の議事に移りたいと思います。ホール・劇場等問題調査部会からの報告を、部会長の草加専門委員からお願いします。

○草加評議員 ホール・劇場等問題調査部会部会長の草加でございます。ホール・劇場等問題について、これまで部会やワーキングの検討状況を御報告させていただきます。

資料4を御説明させていただきます。初めに、部会が設置された背景ですが、過去10年間、首都圏では御存じの方も多いと思いますけども、東京厚生年金会館、五反田のゆうぼうと、青山劇場など、優れた舞台劇場の公演が行われてきたホール・劇場の閉鎖が続いています。また、昨年はさいたまスーパーアリーナや、横浜アリーナなどの大規模施設の改修、それに加えて国立競技場の建替えなどが重なったため、実演芸術団体等から「2016年問題」としてアピールがありました。ホール・劇場やスタジアム・アリーナ等の閉鎖や改修、今後の新築、建替えの状況については、資料4の最後のページに参考情報として掲載しておりますので、見ていただければと思います。

こうした状況を踏まえて、2020年大会に向けて、芸術文化を活性化していく環境づくりとして、ホール・劇場等の課題について専門的かつ実務的な見地から検討するため、昨年の6月から東京芸術文化評議会の専門部会として、学識経験者や実演芸術団体等の方々15名からなるホール・劇場等問題調査部会を設置しました。これまで部会を2回、ワーキングとしてハード部会、それからソフト部会として、それぞれ3回、計8回、それぞれの課題について議論を行って参りました。

今後はこれまでの議論に加えて、現在進められているホール・劇場等の改修や建替え、新築の動向、実演芸術に対する都民ニーズなどに関する調査の分析内容を加えて、年度末を目途に「ホール・劇場等施設のあり方」として取りまとめて公表する予定です。これまでの議論の概要が、次のページにありますので御覧ください。

初めに、ホール・劇場等のあり方を考える前提となる需給の動向ですが、消費者の意識がモノ消費からコト消費にシフトしていることを背景に、ポップス音楽を始めとする旺盛な需要により、ライブ・エンターテインメント市場が過去最高になっています。

その一方で、ホール・劇場やスタジアム・アリーナの新設、建替えが予定され、施設の規模や使用用途によっては需要の充足もみられますが、高度成長期につくられた多くの施設の老朽化に対して、どのように対応していくのが課題になっています。

こうした状況を踏まえて、ホール・劇場等のあり方について、主に四つのテーマについて議論をしております。

一つ目が、既存施設の有効活用です。特に2020年までの間では、今ある施設をいかに有効に活かしていくのが現実的な課題です。ホール・劇場と利用する側としての実演芸術団体とのマッチングを始め、ホール・劇場の運営者や実演芸術団体、国や自治体などの関係者が情報共有できる仕組みづくりを進めることが重要と考えております。

二つ目が、都民の芸術文化へのアクセシビリティの強化です。都民の芸術文化への潜在需要を取り込むため、働き方改革、ワーク・ライフ・バランス推進の動きに合わせて、余暇時間に観賞できる公演を実施したり、誰もが芸術文化に親しむことができるダイバーシティ社会の実現に向けて、高齢者、障害者、子ども、多くの都民の方々が公演に参加できる環境づくりを進めていくことが重要と考えております。

三つ目が、観光との連携、インバウンド需要への対応です。訪日、訪都の国内外の旅行者が大変増加しております。こういう状況の中で、観光施策と連携して、旅行者の方々が様々な公演を見ることが出来る環境づくりとして、公演情報の効果的な発信を進めることも重要と考えております。

四つ目が、中長期的な課題の対応です。ホール・劇場等が今後、中長期的なスパンで芸術文化の創造発信拠点として、役割を果たしていくためには、施設の状況に応じて、老朽化に対して安全対策を始め、施設の改修や建て替えといった新陳代謝、施設の新設など、着実に進めていく必要があります。また、ホール・劇場を中心とした実演芸術団体や自治体、教育機関との地域連携を始め、人材の育成、経営安定化策を進めていくための環境づくりも重要と考えております。

以上がこれまでこの部会で議論した概要でございますが、ホール・劇場は文化芸術の基盤を支える拠点の一つでもあることから、この議論を短期的に終わらせるのではなく、この東京芸術文化評議会と連携して、中長期的な視点で検討に駒を進めていくことが重要になるだろうと思います。問題調査ということで終わらせずに、東京らしい、新たな文化芸術発信拠点の創造あるいは転換に繋がればと考えております。

○吉本評議員 日本芸能実演家団体協議会から問題提起があったと思います。野村評議員、いかがでしょうか。

○野村評議員 前知事に陳情申し上げた立場でもございますので、いささか教条的ですが、御報告を申し上げます。

近年の劇場・ホールの閉鎖・改修によって、都民の芸術鑑賞機会が大きく失われることに危機感を抱き、2015年11月に問題提起をさせていただきました。この窮状に対して、東京都は迅速に調査部会を設置され、真摯に検討を重ねてくださったことに、まず感謝を申し上げます。私は常々、東京都は、我が国の文化芸術の集積地であり、発信地であると申しております。都民や増加する観光客に対して、我が国の多種多様な、豊かな文化

芸術の鑑賞体験の場を広げて下さることが、魅力ある都の要因になると思考いたします。私ども舞台人の命である劇場・ホール問題について、引き続き更なる御尽力をお願い申し上げます。

○吉本評議員 仲道評議員、ご意見ございますか。

○仲道評議員 今、ホールではかつてない現象が起きています。高齢化の影響が大きく出てきているのです。公演にはご年配の方がたくさんいらっしゃるようになりました。都心部まで出るのは辛いので、住んでいる場所の近くの区民ホールに行く。そのため、今、かつてなく区民ホールが活況を呈しています。アメリカのニューヨーク・メトロポリタン歌劇場もそうですが、開場時間を早目にして開演時間まで余裕をとったほうが良いのではないかと、休憩時間を長くしたほうが良いのではないかと、といったことも議論されています。高齢のお客様は、これからもっともっと増えていくわけです。その時のホールへのアクセシビリティのあり方は急務だと思います。

また、これまで公演は夜が主流だったのが、昼間の公演も激増しています。色々な方が劇場に来られるために、私たち演奏家は、夜の公演のためだけに体調をコントロールするのではなく、朝11時からでも演奏できなければなりません。その気概を持ってやっていきたいと思っている若いアーティストも大勢います。ぜひハードの面でもそういったニーズに応えるべく会館の利用時間を始めとする新たな可能性を検討していただきたいと思います。またソフトの面でも、これまでの公演のあり方を打ち壊した、新しいニーズに合った公演の形をどんどん開いていっていただきたいと思います。ぜひ、よろしく願いいたします。

○吉本評議員 確かに全館が昼と夜に公演をしたら、集客数が倍になりますね。

○小池知事 そういうことですね。

○吉本評議員 秋元評議員は、スタジアムやホールを使われるお立場だと思いますが、この件はいかがでしょうか。

○秋元評議員 一番の問題はやはり、どういう形のホールがいいか。つまり、あまりにも多目的につくり過ぎて、使いにくいというのが非常に多いんです。ある種の専用劇場を作らないと、ここで講演会、トークショーもできるし、音楽会も開けるし、何々も演劇もできるという形が非常に多いので、何に特化した劇場なのか、何に特化したホールなのかを考えないと、結局使いにくい、音が悪い、見にくいということになると思います。野田評議員、いかがですか。

○野田評議員 同意見です。昔から、多目的ホールは、無目的ホールという言い方がつく。非常に使い勝手が悪くて、反響を求める芸術と、反響しないほうがいいのと両方ある。そこが根本的に違うんです。

青山劇場は、迫りを40分割ぐらいしていたんですけど、全く使いようがなかった、円席で。しかも安全性のために、上がるのに何十秒もかかったり、ほとんど使った演出がな

と思うんです。やはり長く使うことができるものが物すごく大事だと。

それに加えて言うと、日本はデザインに対するリスペクトが少なく、僕たちもそうですが、日本人の意匠という、デザインにもっとお金をかけなくちゃいけないんです。例えばパリやロンドンで、劇場に行くと、座りたい椅子があるんですけど、日本の公共施設にある椅子は公共の椅子なんです。東京芸術劇場もそうです。会議の場もそうになってしまう。もう少し、デザインはお金がかかるという意識を持っていいんじゃないかと思うんです。

○小池知事 いっそのこと柘席にしちゃうとか。

○野田評議員 そうですね。

○吉本評議員 劇場ホール問題は、閉館が続いて数が足りなくなることから議論が始まりましたが、数の問題だけではなく、中身を含めてもっとしっかり考えなければいけないという御意見でした。小池知事、この件はいかがでしょうか。

○小池知事 参考になる御意見に本当に感動いたしております。仲道評議員のおっしゃるように、近場の会場が求められているお話、それから時間帯の話なども、考えなければならぬし、直ぐにできることかもしれません。そのほか、ハードの面とソフトの面と両方お話しいただいて、本当にありがとうございます。

そして、やはり誰もが来たくくなるような、行ってみたくくなるような、そういう状況づくりということが皆様方をお願いしている最大の目的ですので、今日は本当に意味のある時間を過ごさせていただいていると思います。

先ほど私もマドレーヌ寺院の話をしましたけれども、観たいものが満席だったので、じゃあとということで行ったんです。でも、教会ですよ。そういったことを考えれば増上寺もそうですし、いろいろなベニューが考えられますので、そういった工夫をもっとしていく。

例えば、都立の東京都写真美術館もそうですけれども、コンサートやレセプションなど、色々なことができるように。ノルウェーのオスロに参りました際に、市役所のホールで、ここがノーベル平和賞の授賞式に使われるところだと聞いて、なるほどと思いました。海外では、例えば図書館など、アメリカのワシントンの図書館で、レセプションを行ったりするんですね。あまり歴史のないところなのに、歴史を感じさせる会場になっていました。日本と比べると歴史は浅いですよね。

既にある会場をいかに有効に活用していくかは、こちらの腹づもりと。あと、美術館も勤め帰りに行きたいという方もいらっしゃると思いますので、ナイトミュージアムなども、職員の労働時間など色々考えないといけないと思いますが、そういうことを東京都が始めると、それだけでも多分、都民の皆さんは、ワクワクしてくださるんじゃないかなと思っています。しっかり実践していきたいと思っています。ありがとうございます。

○吉本評議員 仲道評議員から、高齢者向けという話がありましたけれども、私、先週、マンチェスターに行っていたのですが、マンチェスター市は、「エイジ・フレンドリー・マンチェスター」を推進しているんです。

文化施設も、高齢者の方がどうやったら来たくなるのか、来やすくなるのかということを考えていて、マンチェスター市のあらゆるセクションがエイジ・フレンドリーを追及している。これは、WHOの取り組みだそうですが、文化でもぜひそういうことが推進できればいいなと思いました。

以上で議事は三つとも終わりましたが、その他に、都立文化施設の次期指定管理者について、事務局から報告がありますので、事務局からお願いいたします。

○文化施設改革担当部長 資料5を御覧ください。都立文化施設の次期指定管理者につきましては、平成27年9月に開催された本評議会において、選定方法に関する報告をいたしました。その後、具体的な選定手続に入り、昨年12月の都議会本会議における議決を経て、正式に決定いたしましたので報告いたします。

対象施設は、東京都江戸東京博物館を初めとする6施設でございます。指定管理者としては公益財団法人東京都歴史文化財団を指定いたしました。指定期間は平成29年4月1日から4年間でございます。報告は以上でございます。

○吉本評議員 以上をもちまして、全ての議事が終了いたしました。各部会からの検討事項につきましては、本日色々ご意見を頂戴しました。大きな方向性についてはご了解をいただいたと思います。今後、本日出た意見を含めて、更に進めていきたいと思っております。最後に、全体を通じて、小池知事からご発言をお願いできますでしょうか。

○小池知事 誠にありがとうございました。大変濃密な会議になったかと存じます。今日伺いました皆様方のご意見を早速実施できるような体制、まず、このことを職員にも指示をして参りたいと存じます。

あと、宮田評議員、これをつくっているのは組織委員会で、いろいろとございますので、ご協力をお願いしたいと思います。

そしてまた、歴史ある、伝統的な芸術についても、より身近な存在にしていくということ、これからの新しい世代の方々も育てていかなければならないという、大変大きな課題を抱えていらっしゃると思いますので、ぜひ応援させていただきたいと思っています。

アール・ブリュットも、トーキョーワンダーサイトをフルに活用して、切りかえていくということで、よりパラリンピックにも意味を持つ、本拠地にして参りたいと考えております。また、中身については皆様方から色々これからも刺激的なアイデアを出していただければと、このように思っております。

本日は、大変、ありがとうございました。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

○吉本評議員 第22回東京芸術文化評議会を終了いたします。ありがとうございました。

以上